

日本における持続可能な開発に向けての考察 I

藤田英樹

はじめに

本学では、多くの留学生が大学卒業資格と自動車整備士資格を得るために在籍している。

専門応用科目として「自動車の環境と安全性能」が開講され、筆者がその担当をしている。科目では、環境問題で日本の公害を取り上げている。履修者の多くが留学生であり現在の日本の姿を知っていても、過去における環境問題の大きな過ちを知る留学生は少ない。

このことから、日本の環境について知ってもらいたい思いと今後進められる持続可能な開発に向けての考察を文章にまとめることとした。今回は、先駆者の環境意識について述べる。専門家対象ではなく環境問題の基礎知識を得るための学生の助けとしたい。

先駆者の環境意識

現在、環境分野で進められていることは、2015年9月25-27日の国際連合本部で開催された「持続可能な開発サミット (Sustainable Development Summit 2015)」で2030年に向けて「誰一人取り残さない (leave no one behind)」を理念に掲げ進められる、SDGs (Sustainable Development Goals) である。人類がこの地球に暮らし続けるとするのであれば、世界の様々な問題を整理し、解決しなければならない。それに向けての17のゴールと169



図1 SDGsのロゴ

のターゲットから設定されている。図1にSDGsアイコンとカラーホイールを示す¹⁾。

2020年からは、行動の10年とされていたが感染症 (COVID-19) の流行により2030年までの達成が難しい課題も出てきている。

この文章の題目として、「持続可能な開発」という言葉を用いたのは、この言葉があらゆる環境問題の帰着点になると考えるからである。

SDGsの実践は何の投資もなく、個人レベルからでも十分取り組むことができる。今までの環

境施策などとは異なり、知識を得れば老若男女が対応できる。自らの生活を題材にして2030年までに自分の目標に到達できるように努力することが可能である。国としての取り組みでは、目標達成に対する法的拘束力はない。しかし、達成度は国連が策定した指標によって測られるので、この点では各国慎重になっている。今後は多くの分野で、環境活動への取り組み指針となる。

環境問題への先駆者としては、アメリカ合衆国・ペンシルベニア州に生まれた海洋生物学者のレイチェル・ルイズ・カーソン (Rachel Louise Carson: 1907-1964) をあげる。1962年の『沈黙の春』(Silent Spring) が良く知られた著作である。アメリカ農村部の四季の自然に満ち溢れた風景が、空から降ってきた白い粉によって自然が枯れ、死の世界に変わっていく。豚が育たない。リンゴが実らない。子供の突然死も起こる。体の調子が悪いと訴える人が増えてくる。DDT (dichloro-diphenyl-trichloroethane) という当時非常に効果的だと思われていた農薬・殺虫剤の使用による状況が記述されている。(図2左)

私たちの住んでいる地球は自分たち人間だけのものではない—この考えから出発する新しい、夢豊かな、創造的な努力には、《自分たちの扱っている相手は、生命あるものなのだ》という認識が終始光かがやいている。生きている集団、押したり押しもどされたりする力関係、波のうねりのような高まりと引き—このような世界を私たちは相手にしている²⁾。

《自然の征服》—これは、人間が得意になって考え出した勝手な文句にすぎない³⁾。

おそろしい武器を考え出してはその鋒先を昆虫に向けていたが、それは、ほかならぬ私たち人間の住む地球そのものに向けられていたのだ⁴⁾。

地球に住んでいるのは人類だけではなく、多くの生物が生きている。人間に害を与えるからそれを完全排除する行為は深く考える必要がある。新たな化学薬品を開発し、その有効性だけを主張しても地球に大きなダメージを与えることへの配慮に欠けているのではないか。

この警告の書により、ケネディ大統領が諮問委員会に調査を命じ、DDTの全面使用禁止につながった。ただし、殺虫剤に関しては一定の効果期待できるものも当然存在する。その用法や容量を考えずに無にしてしまうことは、疾病予防ができないなどの危険な側面も存在する。

1965年の『センス・オブ・ワンダー』(The



図2 レイチェル・カーソンの作品

Sense of Wonder) には、自分の周りの環境・自然との関わり方についてこう述べている。(図 2 右)

「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性は、やがて大人になるとやってくる倦怠と幻滅、わたしたちが自然という力の源泉から遠ざかること、つまらない人工的なものに夢中になることなどに対する、かわらぬ解毒剤になるのです⁵⁾。」

「自然にふれるという終わりのないよろこびは、けっして科学者だけのものではありません。大地と海と空、そして、そこに住む驚きに満ちた生命の輝きのもとに身をおくすべての人が手に入れられるものなのです⁶⁾。」

小さな頃から自然と関わることで、何気ない小さな変化に気づくことができる。そんな接し方ができるのであれば、環境を痛め付けるようなことはできないし、持続可能な形での発達を考えた人間活動をするのではないか。という環境・自然教育の理想が示されている。

この作品は没後に出されたもので、レイチェル・カーソンが我々に宛てた最後のメッセージといえるものである。

もう一人は、田中正造 (1841-1913) (以下正造翁とする) である。天保12年11月3日、下野国安蘇郡小中村 (しもつけのくに・あそぐん・こなかむら 現在：栃木県佐野市小中町) に生まれた。

栃木県教育委員会の「とちぎふるさと学習」には次のように書かれている。足尾銅山鉍毒問題解決のためにその一生を捧げた日本における公害問題提起の先駆者としている⁷⁾。

時系列に正造翁の行動と足尾近郊の環境変化を記述する。渡良瀬 (わたらせ) 川下流は、稲作が盛んで大変豊かな土地だった。しかし、足尾での銅生産が増えるとともに豊かな自然がむしばまれ始めた。1880年には川の水が濁り、カエルや魚が白い腹を見せて浮かび上がった。栃木県令から魚類捕獲禁止令が出される。水に浸かった足の指が腫れあがり、種をまいても作物が実らない、不思議なことが続いた。井戸水を飲めば必ず下痢をし、子供の死亡率も異常なほど増えた。川に何か毒でも流れていないか、足尾銅山の工場から出される水が原因 (水質汚濁) ではないかと村民も心配するようになった。また、工場から出る煙 (大気汚染) のせいで、山の木々は春になっても芽が出ず枯れていった。1890年には、渡良瀬川流域の村は大洪水に見舞われ、足尾銅山の鉍毒によると思われる被害が大きく拡大した。被害状況を調査した正造翁は、被害のひどさに驚き解決のために、自分の一生を捧げようと決心する。1891年に帝国議会で鉍毒問題について「足尾での銅生産を停止するように」との演説を行った。これは日本における公害問題を取り上げた最初の出来事となった。しかし、殖産興業・富国強兵政策などの事情により、また、原因が鉍毒によるものであるかわからないとの理由で問題にされなかった。正造翁は何度も議会で訴えた

が鉱毒問題は一向に解決しなかった。

正造翁は帝国議会で訴えても無駄だと考え、1901年に明治天皇へ鉱毒問題の直訴を試みる。これにより世論も盛り上がり、政府による鉱毒調査会が動き出すが、1906年に土地収用法に基づき強制買収により、谷中村をなくして遊水地を作ることとなる。これは解決にはならず、正造翁は反対運動に励むこととなる。その後も谷中村復活運動などに関わり、1913年谷中村への帰路病に倒れて亡くなる（享年73歳）。1973年に足尾銅山が閉山する。1996（平成8）年にボランティア団体「足尾に緑を育てる会」が発足し、植林活動が開始された（以後、毎年植樹が実施）。これは、銅山での坑木利用、製錬燃料のための大量伐採、大規模な山火事、製錬所からの亜硫酸ガス（SO_x）による裸地化から山の緑を再生させる活動となっている。

小松裕著の『真の文明は人を殺さず 田中正造の言葉に学ぶ明日の日本』には、正造翁の言葉だけでなく思想に学び、「真の文明」を樹立することの重要性が強調されて述べられている。小松氏は、40年以上にわたり正造翁についての研究をされている。時代背景を離れた現代においてもその思想が生かされることが伝えられている。（図3）

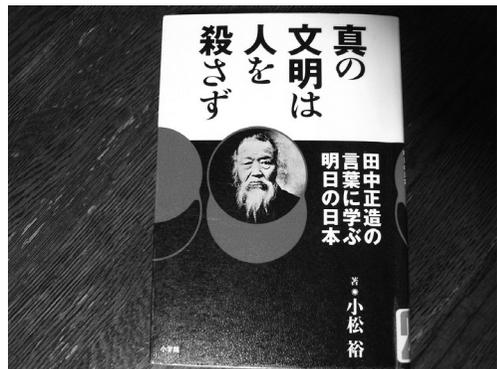


図3 小松裕の作品

ここでは正造翁の二つの言葉を引用する。

真の文明は 山を荒さず 川を荒らさず 村を破らず 人を殺さざるべし⁸⁾ (1912年6月17日)

少しでも 人のいのちに害ありて 少くは よいと云うなよ⁹⁾ (1903年10月21日)

一つ目は、近代文明そのものに対する痛烈な批判であり、克服するための道筋を示している。二つ目は、政府関係者に詠んだ歌である。「毒食」（どくじき）＝鉱毒に汚染された米や麦、野菜類を知らずに食べている被害民の状況を表して使った言葉であり、「毒食」を防止する責任は政府にあるとしたことから詠まれたものである。鉱毒が最も困るのは、目に見えないことであり、濃度の差や被害も様々である。被害民が「自分で害をかくす」ことまで起きていた。これは、後に説明する四大公害病についても同じことが繰り返されることとなる。

考 察

レイチェル・カーソンについては、多くの専門家も取り上げているのでそれらの文献を辿ることでもより理解が深まる。『センス・オブ・ワンダー』にあるように自然に身を置いて考えることは重要となる。環境を勉強としてではなく、この地球で生きるためのこととして考えればその

返答が見えてくる。幼少期から自然に親しむ・接することによって、自然環境への適応を考えた行動ができるようになる。これは明らかに経験値に比例する。自然環境だけでなく、教育・学習環境、交通環境、家庭環境、医療環境などあらゆる場面を想定すれば環境の取り巻きの多様であることも理解できる。

田中正造翁については、多くの日本人が、田中正造＝足尾鉍毒事件（問題）をセットにして学校のテストのために記憶した程度で、それ以上のことは知り得ていない。後に水俣病の項で紹介する作家の石牟礼道子（いしむれみちこ）氏は「私の思想上の師は、田中正造翁です。」¹⁰⁾と明言する人物である。内村鑑三も足尾銅山の運動に身を捧げる正造翁の姿に打たれ親交を結ぶ。これらの人は本質的に在野（ざいや）の人だということ。正造翁は一時期、国会議員をつとめているが、独自の活動でなければ願いは叶わないと悟り、国会議員を辞職している。在野でなければならぬということではないが、この在野には、次の時代を作り上げる叡智が眠っている。小さな活動を継続し、「持続可能な開発」のために尽くす人材も存在する。

化学物質を用いる場合、その歴史時点において良いと考えられて使用し、広がっていく安全性の問題。地域あるいは地球上において、有限容量の中で、拡大していく人類の活動をどのように調整していくのか。人間が自然とどのように共生していけるのかという問題がある。これらは「持続可能な開発」を考える上での重要な基盤となる。

お わ り に

現在のコロナ禍（COVID-19のパンデミック）において、人類がすべきことは何なのか、経済活動を軸で動いてきた世界がここまで脆弱なのかと不思議なくらい疑問が山積みである。コロナ禍の前に戻るのではなく、コロナと共存できる環境を人類が考えリスタートをいかに早くできるかが今後の課題となる。「持続可能な開発」も同様で、過去の歴史や先駆者の残してくれたものを参考にして選択を誤ることのない良い道へ導いていく必要がある。

今回取り上げた先駆者の他には、アメリカ合衆国・ニュージャージー州出身の環境活動家、テオ・コルボーン（Theodora Emily Colborn：1927-2014）が共著1996年の『奪われし未来』（Our Stolen Future）において、種々の化学物質に暴露される人類の未来に関して、人体の内分泌系に影響を与える化学物質（環境ホルモン）の問題に警告を発している。また、アメリカ合衆国・テキサス州出身の生物学者、ギャレット・ジェイムス・ハーディン（Garrete James Hardin: 1915-2003）の作品で、1968年の『コモنزの悲劇』（The Tragedy of the Commons）において、オープンスペース（open space）のような共有資源が勝手に利用されることによって、資源の枯渇を最終的に招いてしまうことを警告している。

環境を考える手法として、池田香代子再話 C.ダグラス・ラミス対訳『世界がもし100人の村だったら』（If the world were a village of 100 people）が参考になる。この作品は、人間100人を母

数として考えた場合の割合を数字によって表現している。環境を数字で比較する場合の例としては、これまでにない表現方法であり、読み手への訴求が強く感じられる。

今回は、日本の四大公害病（水俣病・新潟水俣病・イタイイタイ病・四日市ぜんそく）と持続可能な開発について考察する。

引 用

- 1) 国際連合広報センターHP [<https://www.unic.or.jp>]
- 2) 3) 4) レイチェル・カーソン著 青木築一訳 『沈黙の春』新潮社（2004）P. 324 P. 325
- 5) 6) レイチェル・カーソン著 上遠恵子訳 『センス・オブ・ワンダー』新潮社（1996）P. 52 P. 54
- 7) 栃木県教育委員会の「とちぎふるさと学習」 [<https://www.tochigi-edu.ed.jp/furusato/>]
- 8) 9) 10) 小松 裕著 『真の文明は人を殺さず』小学館（2011）P. 10 P. 66 P. 181

参 考 文 献

- レイチェル・カーソン著 青木築一訳 『沈黙の春』新潮社（2004）
レイチェル・カーソン著 上遠恵子訳 『センス・オブ・ワンダー』新潮社（1996）
小松 裕著 『真の文明は人を殺さず』小学館（2011）
新井常雄写真 村上安正解説 『足尾銅山写真帖』随想舎（2001）
秋山智英著 『森よ、よみがえれ足尾銅山の教訓と緑化作戦』第一プランニングセンター（1990）
井出 明著 『ダークツーリズム 悲しみの記憶を巡る旅』幻冬舎（2018）
政野順子著 『四大公害病』中公新書（2013）
池田香代子再話 C. ダグラス・ラミス対訳 『世界がもし100人の村だったら』マガジンハウス（2001）

参 考

レイチェル・カーソン日本協会：レイチェル・カーソンの生涯や思想を、環境教育・自然観察などの諸活動を通じて社会に発信し、自然や環境を保全することを目的とした団体。現在は地域密着型の団体として日本各地で活動を繰り返し広げている。[j-rcc.org]